

## 「出題の意図」

選抜区分	平成 31 年度（選抜区分：推薦入試） 法学部（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	<p>1 出題の意図</p> <p>（1）出題文選択の背景</p> <p>出典は、長谷部恭男『憲法とは何か』（岩波書店、2006年）である。本書は、リベラル・デモクラシーを再構築した憲法学者である筆者が、「憲法は何のためにあるのか、立憲主義とはどういう考えなのか」について、近代立憲主義が成立した時代状況などをふまえて説明するものである。本問では、その中から、近代立憲主義とデモクラシー、とりわけデモクラシーの歴史的評価について説明した箇所を取り上げた。</p> <p>課題文で筆者はまず、近代立憲主義を、「近代国家の権力を制約する思想あるいは仕組み」とであると定義する。その目的として、「価値観・世界観の多元性を前提とし、さまざまな価値観・世界観を抱く人々の公平な共存をはかること」を挙げる。近代ヨーロッパでこのような思想・仕組みが成立したのは、「宗教戦争や大航海を通じて、この世には比較不能な多様な価値観が存在し、「それにもかかわらず公平に社会生活の便宜とコストを分かち合う社会の枠組みを構築しなければならぬ」だったからである。リベラル・デモクラシーでは、一方で、公的な決定のためにデモクラシーという仕組みが用いられ、他方で、近代立憲主義により、全体の決定に対して私的領域ないし個人の自由が守られる。</p> <p>筆者によれば、19世紀末までヨーロッパでは、デモクラシーは否定的評価を受けてきた。シュミットによれば、公開の議会では公共討議はなしえず、密室における私益の妥協が精一杯となる。アメリカでも、当初、人民による政治は、多数派の横暴や派閥の対立をもたらすものと理解されていた。やがて「共和制」の語を用いて、民主政を肯定的に捉えようとする動きがあり、第二次世界大戦を通じて、アメリカン・デモクラシーはプラス・シンボルへと転換した。</p> <p>デモクラシーによって良い全体の決定がなされるのであれば、そもそも近代立憲主義によって権力を制約する必要はないように思われる。しかし、歴史的にもデモクラシーは常に「良いもの」として捉えられてきたわけではないし、実際にデモクラシーが「比較不能な多様な価値観」を包摂しきれものでもない。それが、近代立憲主義がなお必要とされる所以である。</p> <p>以上のような筆者による近代立憲主義の説明を正確に読み取った上で、一般的に良いものと考えられている「デモクラシー」の評価と、近代立憲主義の必要性について、改めて受験生に考えてもらうことが、出題のねらいである。</p>

## (2) 受験生に何を望むか

まず、上述した筆者の近代立憲主義の説明を正確に理解し、適切にまとめる力が求められる。次に、筆者の主張を受け、デモクラシーをどのように評価するか、それに対応して近代立憲主義が必要か否かについて、自分の言葉で、論理的・説得的に論述することが求められる。

### 2 答案の特徴・傾向

問題 1 では近代立憲主義とは何であるかについて成立経緯をふまえて要約することが求められ、問題 2 ではデモクラシーへの評価と近代立憲主義の要否について両者を関連させて自分の意見を述べるのが求められている。問題 1 は全体的によくできており、問題 2 で差がついたと言える。以下、答案の特徴について述べる。

問題 1 に関して、

(1) 近代立憲主義との限定があるのに、課題文全体を要約してしまった答案が散見された。

(2) 課題文の要約をせずに、自分の知識を書いていた答案が散見された。

問題 2 に関して、

(1) デモクラシーの評価と近代立憲主義の要否を関連させていない答案が散見された。

(2) デモクラシーは良いもの、立憲主義も良いものと、単純に捉えてしまった答案が散見された。

(3) デモクラシーの評価と近代立憲主義の要否という二つのことが問われているのに、一方しか論じていない答案が散見された。

全体に関して、日本語の文法や文章表現に誤り（もちろん、単純な誤字も含む）のある答案が散見された。日本語表現についても、普段からきちんと練習してほしい。

以上のような答案が見られたものの、デモクラシーと近代立憲主義との関係ないしは対立構造を適切に捉えて論じた答案は高く評価された。

本問は要約と自分の意見を別々に論じるものであるが、自分の意見のところは、課題文の筆者の見解に対する賛否を問うているのではない。受験生は、何が問われているのかをしっかりと確認した上で、解答を始めてほしい。また、もし具体例を出して論じる場合には、論証にふさわしい例（本問の場合は、身近な例ではなくて、社会的・公共的な例）を出して論じたほうが良かったであろう。

「デモクラシー」も「立憲主義」も、おそらく、ほとんどの受験生が知っていた言葉であろう。そのような、多くの受験生が知っている言葉について、掘り下げた理解をすることが望まれる。